

平成28年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

## 正月行事

日本人にとってお正月は、今でも特別の習慣が多く残されています。地域による違い、家による違いもありますが、年神様を各家にお迎えし、その年の幸を願い、初春を祝う行事といえます。ここでは、比較的古い慣わしが残っている御岳山での行事を紹介します。

暮れの内にお餅をつき、お飾りなどを準備します。この餅米や飾りの藁わらは御嶽神社を信仰する講といわれる家々からいただき、その藁で家により様々な形の飾りが手作りされます。神棚や門の注連縄しめなわも藁わらで編み、神棚にお供えする鏡餅やお雑煮のお餅も準備します。今でも杵で餅つきを行う家もあります。また、お節料理などの仕込みも何日かけて整えます。

30日までに、年神様の御幣ごへいや各所に飾り付けをし、門に竹を立て、神棚や門の注連縄を替え、新しい紙垂しでを付けます。井戸は数軒で維持されていまして、井戸神様にも正月飾りを持ち寄ります。29日は苦



井戸神様

に繋がる、一夜飾りはいけないなどといわれ、旧暦の頃は28日までに飾り付けを終えていたことでしょう。

31日には『大祓おおぼらい』を行います。6月30日にも行われますが、12月は各家々で半年の間、知らず知らずを受けてしまったと考えられる罪穢つみれを祓はらい清め、使用された祓はらい麻あしは決められた辻などに立てて、初春を迎える準備が整います。

正月三が日は、お酒やお雑煮を年神様をはじめ内神ないしん殿でん（御師住宅の家の中にある神かまど殿）や竈かまど神、恵比寿大黒えいしゅうだいこく、祖霊舎それいしやなどに毎朝お供えします。神様へ供えるお酒やお雑煮の調理は、最近では家長が行う家が多いようですが、古くは7歳になると長男が行う慣わしでした。年神様は東ねた



辻祓

藁に御幣を立ててお祀りする家や、馬場家では専用の神棚をその年の恵方に向け、吊してお祀りしています。

7日には七草粥を各神棚にお供えした後、年神様の御幣や正月飾りは山の神に収めます。地域によっては小正月（15日）まで飾る所もあるようですが、『どんど焼き』の行事に合わせて、古いお札と一緒に正月飾りもお焚き上げされるため、それまで残しておくようです。

11日は『鏡開き』、年神様や神棚にお供えしたお餅をお雑煮などにして供え、家族でいただきます。神様にお供えしたお下がりみたまのふゆは、神様の恩頼（御神徳）をいただけるといわれ、祭典後の直会なおらい同様に重要な儀式です。そして15日は小豆粥で、『繭玉飾り』を神棚に飾る家もあり、小正月で主な正月行事も終わります。

年越しそばを食べ、除夜の鐘を聞き、神社仏閣に初詣に行く。家族そろってこたつに入り、お屠蘇やお雑煮、お節料理をいただき、かるたなどを楽しむ風景も、今では少なくなりました。御嶽でも様々な行事が簡略化の傾向にあります。一番の理由は、コンバインなど機械化の影響で、藁が手に入りづらくなった事です。それ以外にも、家族の減少や後継者の問題など、今後の継続は憂慮されます。

（文責 須崎直洋）



正月神棚



山の神